

14 丸 ACEF

ステイツア-





## 情報過多不感症候群

ACEF事務局長  
船戸 良隆

1998年冬のスタディー・ツアーは、総勢16名、ジャマルプールとカティラに行きました。

バングラデシュの農村で、特に、最近、変化したことは、機械化が著しく進展したことです。4～5年前までは、灌漑といえば、子どもが二人で、桶のような物の両脇にひもを結び、川から田へと水をくみ上げていましたが、今や、どこの田にも水揚げポンプがうなり、乾期でも青々と稲が植えられています。今回、カティラ地区で、初めて、耕うん機を見ました。

さて、今冬は、こんなことが印象に残りました。いつものように、ダッカのスラム地区にあるラルクティ寺子屋学校を訪ねて帰ってきた晩のことです。「今日のスラムでの印象はどうだった。」と聞くと、「別に」と、特に驚いたという反応はありませんでした。

「だって人々はそれなりの生活をしているから。」とのことです。確かに、スラムの人々は貧しいながらも元気に生活していました。しかし、わたしは、ふと、学生時代に筑豊炭鉱を初めて訪れた時のことが頭にうかびました。それは、わたしにとって、ちょっと大袈裟に言えば生涯を決定づける程の衝撃でした。

なぜ、あれほどの貧困にショックを受けないのだろうか。私には分かりませんでした。しかし、しばらく経ってから、ある学生の解釈が私をひどく納得させたのです。

「今の世代、学生はテレビで育ってきた。その豊富な情報の中には、もっと悲惨な、もっと深刻な情報がいくらでもある。そして、テレビを見ている限りでは、特に、それに驚いたり、感動したりはしない。ダッカのスラムも、そのテレビの一場面としか見られなかったのではありませんか。」

情報の氾濫が、人間らしい感性を失わせるとしたら、「人間が生きている」世界は無くなります。過度のコミュニケーション（情報）が、人間らしくコミュニケート（情報を伝達する）することを失わせるとしたら、コミュニケーションとは何なのでしょう。莫大な、そして、多種多様な情報が、人間らしい喜怒哀楽を失わせるとしたら、次の世代はどうなるのでしょうか。



## 「自分を見つめる」(創世記12:1~4)

このスタディーツアーでは、毎朝、毎夕礼拝をいたします。マタイによる福音書第5章より順に読んでいきますが、新訳聖書の一番初めに「アブラハムの子ダビデの子イエスキリストの系図」とあり、イエスの系図がアブラハムから始まることが書かれています。今読んだところはそのアブラハムの旅立ちの場面であります。神と自分を探し求めて新しい自分の生き方を求めての旅でありました。

私たちのスタディーツアーはたった2週間の小さな旅ですが、よく「自分探しの旅」ということが言われます。最初の頃はアジアを知ろうとして参加する方が多かったように思いますが、最近は自分を見つめなおしたい、自分の生き方を見つけない、という方が増えてきたようです。本当に自分を見つめるということは、何らかのきっかけがないと、大きな出会いがないと、インパクトがないと難しいかもしれません。私たちは今だんだんに自分を見失っているという状態にあるのではないのでしょうか。もちろん私も含めてです。

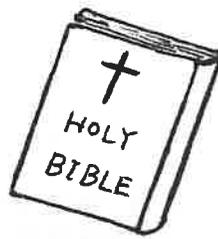
日本も戦後は何もない状態で、バングラデシュと同じように非常に貧しい国でありました。何もない時代から高度成長期を経て日本は大変豊かになってきました。でもこの豊かになってきた日本の中で失ったもの、それは自分自身であると言われます。何もなかった時代からの発展なので、多くの物をもつことが豊かさの象徴であるように言われて、多く持ちたいという考え方が根底にあったように思います。私も自分の人生を振り返ってみるときに、「大きいことはいいことだ」というコピーがとても流行った時代があります。より大きく、より強く、より早く、より広く、何でも「何々より・・・」という競走社会に入っていました。そしてだんだん豊かになると同時に、量の問題から質を問われる問題へと転換していきます。しかし、クオリティライフなどとかっこよく呼んでみても、あの人より、この人より、アメリカより、ヨーロッパより、という他者との比較の中に生きている限り、その本質は何も変わっていないのです。そしてよりよく生活したいという結果、自分を見失ってしまったということです。

つい4~5日前の新聞に、「今の現代社会は自分を見失っている人が多い。その中で、大人はすぐに中央線に飛び込み、子どもはすぐにナイフをちらつかせることになってしまふ、困った世の中である。」と書かれていました。そこまで短絡的にいなくても、自分自身を見失ってしまっている人は非常に多いのではないかと思います。私もよりよく生きたいと思ってきたけれども、よいと思ってしてきたことが、そうではないと覆されたときに、ポキッと折れてしまったのです。自分が正しいと思って生きてきたことがそうではなくなったら、自分はどうか生きていったらいいのか。今までの自分は何だったのか。今まで生きてきた自分の生は何だったのか。もう自分がわからなくなってしまうました。

それがこのACEFのスタディーツアーに参加しようとした一番最初の動機であります。私はこの地で人々のたくましく生きる力を見ました。確かに、日本に比べたら物はないし、生活は困難ですが、家族に限らず他者を思いやるやさしさであふれています。そして私も元気をもらい、生きる力をもらい、目を輝かす生き方を知りました。バングラデシュの人々の中に神さまの愛を見たのです。

アブラハムは神さまに「わたしが示す地に行きなさい。」と言われて、「主の言葉に従って」旅立ったことが書かれています。神を出発点としています。自分を出発点とするのではなく神を出発点とすることによって本当の自分が見えてくるのだと思います。

(井上儀子)



## 聖書にふれて

今までは聖書を読んでも、牧師の話を聞いても、いまいちよく分かりませんでした。「それは違うのではないか。」などと思った事もありました。しかし、今回のスタディーツアーに参加して改めてキリスト教と向かい合ってみると、その話に対して納得することもありましたし、なんとも不思議な話ですが私の心の中に聖書の箇所が自然に入り込んでくるように感じたのです。そうやってキリスト教に触れ、聖書に触れて思ったことは、今回私がこのツアーに参加することになったのも神様が導いて下さったからではないかということです。すばらしい出会いがあり、すばらしい経験をすることができました。神様に感謝します。このツアーでキリスト教に触れることができ、私はうれしく思います。

(アームミヤ)

何気なくめくった箇所に、自分自身の事が書かれているみたいで時々驚きました。それまで、「聖書」とはクリスチャンだけが読むものと思っていたのに、実はそれを読む人すべてに語りかけてくるものだと知ったからです。自分が読んでいのに、逆に自分の心が読まれているものではないかと何度も思いました。どうやら聖書は心を写しだす鏡のようです。

(水野鉄也)

高校時代に田舎の教会へ行ったことはありますが、世界の宗教遺跡にふれてみると、それぞれの民族に固有の理由づけがあるようです。私は私一人の宗教（というか世界観）を持っていますが、他と優劣を論ずるつもりはありません。

(Mr. ゲタ)





## スタディーツアーメンバー寺子屋をつくる

今回のスタディーツアーではプーバイルに行きました。プーバイルでは今、レンガ作りの寺子屋を建設中でした。その建設中のプーバイルスクールのレンガ運びと地ならしをメンバー全員でお手伝いをしてきました。

### 仕事内容

#### ☆レンガ運び

頭の上に、わらでわっかにした物をのせ、そのまた上にかごをのせて、かごの中にレンガを入れて運ぶというもの、だいたい5～8個ぐらい。某Fさん10個ものせて大張りきり、これを2往復もしちゃうんだから「シュンドウール!!」

#### ☆土砕き

大きな土を鍬の後ろの部分で砕くという単純な仕事、日頃のストレスを発散するのにもってこいの仕事かも・・・「ねーN子さん」

### ☆プーバイルスクールってどんな学校?☆

学校のない村の地主が、ある日SEPスタッフのところに来て「土地を提供するので学校を建てて欲しい。」と相談に来ました。スタッフはこのようにお願いしたそうです。「もし、あなた方が本当に学校を必要としている気持があるなら、それを形に表してくれませんか。そうすれば、先生はSEPが責任を持ちましょう。」そこで村の人達は、学校までの道を切り開き、費用を出し合って小さな学校を建てました。そこでSEPは先生をプーバイルスクールに派遣しました。これがプーバイルスクールのはじまりです。しかし、たびかさなる台風のために一度は倒壊してしまいましたが村人は造り直しました。しかし、もうぼろぼろになってしまったのでSEP初のレンガ造りの学校を建てることになりSEPスタッフが測量をして、今建設中です。

# The Days in Bangladesh



Aチームの艶姿



Bチームの艶姿



「紙芝居劇ももたろう」



学校見学



「ロンドン橋落ちた」は大人気



お誕生日ケーキのろうそくを  
吹き消すマラカール先生

# We Love Jamalpur:

3/3 ~ 3/11

Aチームメンバー

われらのボス

ゲタ

アムニア監督

ドスト

儀子さん

森二郎さん

糸谷津子さん

哲

シュートカール

スペシャル

アムニア主理

アムニタキル?

真実者

葉子

由香

千春

WITH アルバートさん、 モントさん  
 ボス  歌手

JAMALPUR



3.5  
ハルクリ  
スクール



3.9  
チャンピオン  
スクール

3.6  
ボートトリック

3.8  
・ マインジンの  
教会へ  
・ テーゼ訪問

  
SEP office



3.5  
ゴマリア  
スクール

MYMENSIGH



3.4  
バスチョラ  
スクール

  
DHAKA

3.9  
ボイタリ  
スクール 

# Jamalpur SEP staffs



ショフィックさん (オーガナイザー)

彼の歌は SEP の中でも 1, 2 を争うぐらいとてもうまいんです。一度彼の歌を聞いたら頭から離れなくなっちゃう。副業でジャマルプール駅の近くでお店もやっています。



カーンさん (スーパーバイザー)

ちゃめつけたっぷりで、いつもニコニコやさしく僕らのことを見守ってくれていた。彼の口癖は、「〇〇さん、モジャ」。オフィスの近く (徒歩5分) で、ただ今一人暮らしをしています。  
モジャ…ベンガル語で「お祭り」の意味



ムクレスさん (スーパーバイザー)

去年まで SEP で働いていたラーマンさんの次男坊。今年から SEP で働き始めました。カーンさんと、ドストなんだったって。彼はシャトシのベンガル語の先生でもあります。

ドスト…ベンガル語で「親友」の意味  
シャトシ…「さとし」のこと。ベンガル語には「サ」の音がない



モタレブさん (食事担当)

A チーム女子メンバーにももてて?! すごくカッコいいんだって。ヘモントさんが「ハイ モタレブ!」と呼ぶと、遠くにいても走ってやってくる。モタレブに会いたいあなた、一度呼んでみてはいかが? もしかしたら、来てくれるかも。



アルパートさん (SEP の責任者)

今、日本で公開されている映画の Mr. ビーンにとっても似ている。小話をたくさん持っていて、いつもメンバーにお話ししてくれました。話のはじめはいつも、「One day…」と始まります。アームミヤが彼にぞっこんなんだって…

アームミヤ…桂太郎のこと。王しくは「マンゴ太郎」



ヘモントさん (教育プログラム担当)

歌がとても大好きで、歌い始めるととまらなくなっちゃう。真夜中でも大きい声で歌っていました。眠くなると顔に出るのですぐわかっちゃう。ニックネームはグモント。優しいお兄さんでした。

グモント…ベンガル語で「眠る人」の意味

# ジャマールプールでの一週間(日誌より)

㊦ 3月3日(火) - ダッカからジャマールプールへ

真実香さんがすぐそばの村へ連れていってくれた。私はこの村が大好きになった。みんなが私たちのまわりを集まってきて、大歓迎してくれる。そこはまるで夢のような、映画のワシンのような雰囲気である。おばさんが私の腕に手を付けてくれたり、みんな記念写真みたいなおしゃべりをして写真を撮ったり…。そして夜になるとハモントさんのナイスな歌声とともに、ピアノで盛り上がり、夜空には今までに見たこともない満天の星(オネーク・タラ)が広がり、とにかくすべてが感動の一日でした。(よつこ)

㊦ 3月4日(水)

今日は、ジャマールプールの学校(バスケラスクール)へ行った。私は2回目の訪問だったが、学校へ行くリキシャから見る風景は素晴らしい!! きっと(というよりも、絶対)ここには神様が居る、と思えた。日本やダッカでは、そう感じる所に出会えない。リキシャでは、本当に神様を感じる事ができた。(まみか)

㊦ 3月5日(木)

夕食前にアムミヤに水をくんでもらって、お風呂にした。昨日はのどが痛くて水浴びを控えたけど、もう「ままよ」と思って浴びた。外の井戸で真実香以外の3人が洗たくしながら楽しそうにおしゃべりしているのが聞えた。まさに「井戸端会議」というやつだ。表の方からハモントさんの歌声が聞こえてきた。薄暗い前庭でタンバリンを打ちながら歌っている。「バンガラ～カバンガラ、バンガラデシュ」'娯楽'というものが多分ないこういう所では歌が本当に心を楽しませてくれる。(スッコ)

㊦ 3月6日(金)

夕方市場へ行き日本食の買い物に皆で行きましたが私は道端の小供(小学校2年位)のサンパツ屋でどげをもらいました。5タカ(15円)でインドに比べると高いと思いました(インドでは6円)がアルバイトさんに聞くとスペシャルプライスということ。普通の人は2タカぐらいだそうです。夕食が楽しみです。(ケタ)

㊦ 3月7日(土)

今日は午前中新しい学校(ボイタマリスクール)に行く予定だったのに、大雨が降って結局はそのせいで学校訪問は中止になりました。このスタディツアーの期間は乾期ということもあって、雨は降らないうと勝手に思っていたので突然の大雨に大変ビックリしました。(ゆか)



3月8日(日)

テゾへ行、たけど、私はここで、とても良い経験ができた。一番は国や宗教、肌の色や文化を超えて集まった人と交われたこと。今までこんな機会なんてなかったから、一つのテーブルを囲んで食事をしたり、おしゃべりができたことは本当に新鮮でうれしかった。世界は一つだねと実感できた。(ちはる)

3月9日(月)

ジャマルプールで過ごす最後の夜になってしまいました。そこで「Who is he?」のショートストーリーのショーをした。皆がねしすまってからハモントさんによるカラオケ大会になった。なんか悲しかったので、ここでストップ。(さとし)

3月10日(火)

今日はいよいよ派のお別れの1週間を有意義に過ごした私たちにとっては、ジャマルプールは永遠の故郷みたい…。朝のミーティングでは1人1人が感想や意見を述べ合ったけど、とても心の中で感じるすべてを言葉にするなんて難しかった。アルバートさん、ハモントさんを始め、ショフィークさん、ムワレスさん、カンさん、モタレフさん母と母と私たちを心から受け入れてくれて、これらの日々を共に生きてくれたことに心から感謝します。(ようこ)

おせーじ

~ Noriko さん ~

みんな ありがとう! 何といてもこのチームのピットは「アムミヤ」の紙芝居劇。絵津子さんの抜粋のセンスによる配役決めで大当たり! 飛行機の中からベンガル語のセリフの特訓のおかげで、結構役に立つセリフも多く、ベンガル人とのコミュニケーションにも一役買っていたのでは? そして劇を演ずることで、早くからチームのメンバーが仲良くなったのは事実です。ただ一残念なこと。それは、みんなにすてきな紙芝居の絵をどうして写真に撮っておかなかったのか悔やまれてなりません。

素敵な一週間を  
本当にどうもありがとう!  
オネック ドンノバット!!



# 学校訪問

## バスチョラスクール

ジャマルプールオフィスから、最も遠いところにある学校の一つ。リキ車で一時間近くかかった。2つの教室と職員室がそろっている。校庭もとても広い。教室に二人ずつ入って、授業を見学。2年生のクラスは英語の授業で、ice cream, jeep, kiteなどの単語を先生について大きな声でスペルアウトして練習していた。校庭で凧あげやサッカーをしてしばらく遊んだあと、「ももたろう」を上演した。外にも人が大勢おしかけ、小屋が倒れそうになってしまった。

## コマリアスクール

英語の授業で pen, cat, bag などの単語を練習していた。鐘が鳴ると別の先生が入ってきて、そのまま授業は続行。算数が始まり、一桁の足し算の問題をえんえんとやっていた。学校の前に近所の家庭を訪問し、三人の主婦たちと交流した。12歳で結婚したり14歳で子どもを産んだりした彼女たちと、多少ぎこちないながら質問をしあい、農村の生活の一端に触れることができた。

## ノルクリスクール

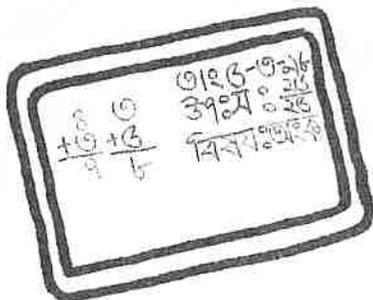
ここの学校の子どもたちは、本当に元気で人なつっこくて、教室にはいるとお花をたくさんくれ、髪にさしたり、ベンガル語でいっぱい話しかけてきてくれた。外ではfrisbeeや凧をあげて遊んだ。午前の授業が終わると、グラウンドに生徒が集まり、ヘモントさんの指揮で国歌を歌ったり、掛け声にあわせて頭の上にあげた手を一斉に動かしたりしていた。ヘモントさんの態度がすごく頼もしくてかっこよかった。その後、先生の家を訪問。家を見せてもらい、ボロイとココナツジュースをいただいた。

## ボイタマリスクール

途中でリキ車を降り、ちょっとした川を渡って学校に着いた。まだ机もイスもなく、ごごのようなものの上に30人くらいの子どもたちがぐると並んで座って勉強していた。上の子について来たような幼い子から、立ち上がると小屋の天井に頭がつかえてしまう大きい少女までが一緒になって、大きな声で教唱したり、教科書を暗唱したりしていた。識字率がゼロの村なので、先生は別の村から来ており、学校の始まる前に家々を回って子どもたちを呼び集めるということだった。この村を外国人が訪れたのは初めてで、村の人たちから質問も受けた。結婚はまだ、という私たちに少々驚いているようだった。その後先生の家を訪問してご主人にもお会いし、ココナツジュースやバナナ、米菓子をいただいた。

## チャンプールスクール

オフィスのすぐ近くの村にあり、夕方歩いて訪ねた。壁のないシンプルな小屋で、幼児クラスが学んでいたが、教室の子も、周りの子どもも次々に花をくれ、メンバーたちはみな花だらけになった。先生の家を訪ね、中庭でイスに座って村の人たちとの質疑応答が始まる。若い男の人たちも混じり、ものすごい人だかりの中で、質問がえんえんと続いた。メンバーもだいたい慣れしてきたためか、とてもいい交流の時となった。



৩১৫-৩-২৬ 日付 ৯৪ ৩/৫  
উৎস: ২৫/২৪ 生徒の出席率 ২৫  
বিষয়: অংক 授業内容 算数



## ももたろう一座、バン格拉デシュをゆく



### 1. 「ももたろう」前夜

勉強会の席で、「カルチャーショー」の存在を知った。私たちが歓迎して子どもたちが披露してくれる朗読や踊りは、相当なレベルであるらしい。そのお返しに我々も何かやるとあれば、これはいい加減ではすまされない。しかしこの、今日集まったばかりのいかにもバラバラな8人のメンバーで、一体何ができるのか？…ムムッ、このメンバーたちの顔…これは何かを語っていないか？…何かができる…しかし、一体何が？……！桃太郎だ!!…サルがいる、オニがいる、じいさんがいる、…桃太郎が、犬が、キジがいるではないか。

### 2. 機上で

ピーマンの席に落ち着く間もなく、『紙芝居劇ももたろう』のベンガル語台本が配られた。ぴっしりと意味不明のカタカナが並んでいる。ベンガル語で演じようという大胆不敵な試みを成功させる鍵は、機上で棒暗記にあると思われた。最初にこの作業に取りかかったのは、予想通り犬役の葉子である。最後まで台本に向かわなかったじいさん役のゲタさんは、「あとで集中してやるから」と言い切った。頼もしい言葉だ。

### 3. 緊張の初舞台

あっという間に、カルチャーショーの時はやってきた。我々は本読みと立ち稽古をそれぞれ一度行っただけで、本番を迎えた。子どもたちの朗読や踊りは、聞きしにまさる素晴らしい。我々も、もう恥ずかしがってはられない。「オネークオネーク…」儀子語り手の流れるようなベンガル語が始まった。じいさまが登場する。会場はすでに盛り上がり、拍手まで起こっている。…が、じいさんの台詞が…出てこない！語り手のささやき声に助けられて、ゲタさんがようやく言う。「…シュンドール、ディン」

女性陣は素晴らしい演技だ。桃太郎役の由香は長い台詞をよく覚え、真美香演ずるサルは歩くだけで大受けだった。

### 4. ジャマルプールのももたろう一座

寺子屋学校への道は、一面の田んぼや畑の中に続くでこぼこのあぜ道。棒つきの桃を日傘のようにかざした千春と「ももたろう」の旗をかついだ由香が、派手なサロワカ姿でリキ車に並んで座っている姿は、まさに旅回りの役者だ。ももたろう一座の面々は、リキ車に揺られ、風景に見とれ、時折道ばたでこの一行の道行きを興味津々で見ている村人や子どもたちに愛嬌をふりまきながら、最後の舞台となる寺子屋学校へと向かうのだった。

### 5. 感動の千秋楽

授業見学のあと外あそびをし、そして「ももたろう」の時がやってきた。二度目にしてラクだ。どんどん人が集まってくるから早く始めよう、とアルバート。そう言った割に解説の話がやけに長い。二つの教室の境をとった会場に、溢れそうな子どもたち。

芝居は生ものだ。こちらの出来も毎回ちがうし、観客の反応もちがう。ダッカの観客席は笑いの渦だったが、ここではほとんど笑いが起こらない。年長の子は楽しそうに見ているが、はたして小さい子に、我々のカタカナベンガル語は通じているのだろうか。不安になる。役者たちのできはいい。オニ役の哲も頑張っている。

歌も終わり、挨拶をする。拍手、そして、「もう一つやって」という声がわき起こる。ああ、楽しんでくれたんだなあ。よかった。…めでたし、めでたし、タイナ？

by 演出兼ばあさま役の中西絵津子



# Memories in Jamalpur

## 列車の旅

ジャマルプールへは列車を利用した。まさに異国を感じる空間だった。車内には、ベンガルソングが陽気に流れ、人々は窓から荷物を出し入れ、頭上で大きな扇風機が音をたてて激しく回る。水(パニ)やお菓子などを売り歩く姿もある。窓から見る光景は、まるで映像をみているように魚群かかった。でも何より不思議だったのは、車内でも馬車でもいつの間にか人々が私たちを取り囲んでしまうことだった…。

ところでこの列車の旅、行きは快適だったものの、帰りはものすごく石少ぼり!! あっという間にカバンの上には白くチリが積もっていた。でも、これじゃなまね、バングラデッシュは。 by ようこ

## ジャマルプールの市場

ビー玉、100コ入りの袋とあめ、ビスケットを買いました。あめはどれもマサラ入りでとても辛くて閉口しました。毎日、同じ食堂で茶を飲み、道端の小学3年生位の男子のヒゲツリ屋へ通いました。

毎日、安全カミソリの刃をかえて、スペシャルライス(5タカ=15円)で、インドより高かった。食堂では、ゲタバキとかわったライターが人気でした。 by ゲタバ

## ♪ リコーダーは風によって

金曜日はお休みの日なので、みんながボートトリップに行った…。その帰り、列車に乗りながら由香ちゃんと一緒にリコーダーを吹いてみた。人々が不思議そうに私たちを見ていた。緑の米田と風がとっても気持ちいいジャマルプールで、日本では経験しにくい… だけどいつもどこかで求めている幸福感が味わえた。素敵な演奏会だった。 by チハル

# 先生たちの素顔に出会って

朝からあざい雨。予定していた

学校訪問は出来ず...。突然、アルバートの

「早く行け!!」の一言で、ジャマルプールのスタッフの人たちは大急ぎで出て行く。スタッフたちはどこへ行ったのかというと、アートのチャンポール・ジョカ・コリア・ルクリの学校へ手分けをして先生方を呼びにいられたのだ。その午後、なんと15人近くの先生方が来てくれたのです。突然にもかかわらず...

私たちはサリーを着せてもらい、メンディーをしてもらった。ついにの前まで、大や鳥、サル、いばあさん、桃太郎という、マヌケ?! なことをしていた私たちは「美せ」としか言えないくらいシュンドカール先生の学校へ行けば「あやへんと先生の素顔してるけど、ここではかわいい女の子。言葉はほとんど通じないけど、女同士、何か通じるものがあった。そして私たちは大きな喜びを感じた。ジャマルプールでは、女の人には「あれダメ、これダメ」ばかりだったけど、この日は女の喜びを全身で感じたわー♡

by まみか

## WHO IS HE?

オフィスの隣に住む大家さんについてちょっと話しておこう。カーダルさんという、実に愉快なお父さんがいる。毎日、食事の頃になるとやってきて、大きな声で何やら叫んでいる。実は彼は高校の先生で、私たちのためにベンガル語で詩を朗読してくれていたのだ。それにしても、いつか突如現われそして消え去り、おまけに夜中は「いびきか」こちらまでひびき、ホント私たちを楽(は)ませた(?)くれた。





“バングラで頂いた食べ物”

**朝食** — 朝は基本的には、ルティというクレープを厚くしてようなものを食べます。生地から作って窯で焼きます。味はほとんどありません。これにバナナを巻いたり、カレー味のキャベツを巻いて食べるとGOOD (^^)

**昼食** — カレーです。カレーの具はじゃがいも、なす、鶏肉、魚など 日によってさまざまですが、日本のカレーと違って少しシャバシャバしています。それはダレという豆スープをかけるからです。米もパサパサしていて、カレーとマッチしてクワモジャ(とてもおいしい)。きゅうりやニンジン、トマトなど生野菜もありました。

**夕食** — 昼とあまり変わりません。そうそう.. なすの揚げ物パリパリしておいしかった。デザートはパイやトイ(ヨーグルト) これまた絶品 (^^)



← 毎食後に飲むチャ。

本当においしい食事を  
ありがとう♡  
いをこめて—

“病のおかげ”?!

**た** くさんの思いを胸に、ジャマルプールからダッカへ帰って来た時、それは突然起こった。おいしいカレーも、水さえ口に入らない。目の前がぐらくらし、吐き気と胃痛が私をおそう。あれ程、自分をコントロールできなくなったのも初めてだった。しかも、田舎であれ程はしゃいで“楽しい日々を過ごした”あとだから余計にくやしい。結局、翌日はシヨッピンクもシェアリングも不参加。ひたすら高熱と暑さに耐えた。しかし、思わぬところで素晴らしい出会いや喜びがあった。**昼** 私が寝ている時、マラカール先生やスタッフさんが気づかってくれたり、オーガナイザーのリビカさんは、私の汗をふいたり、ファンを回してくれたり、おとそばにいてくれて、その姿は母そのものだった。もちろんメンバーのみんなも、差し入れや温かい声をかけてくれ、買い物に行けなかった私にお土産をくれて、うれしくて涙がでてた。何より公文さん(通称: よろこ主治医)には、薬や症状などおしえてくれて精神的にも強かった。

このように、予想しなかった病気で、みんなの愛情に角虫れることとなり、改めて、このバングラデシュで学んだ「他人の喜びは自分の喜び」を実感した。

おかげで2日後には、朝食ではみんなにからかわれながらも、モリモリ食べてすっかり元気になりました。

**ち** なみに、田舎での生活では、午後のお昼寝タイムがあるのだが、私は1度も寝がにはしゃぎまわっていたのだ。

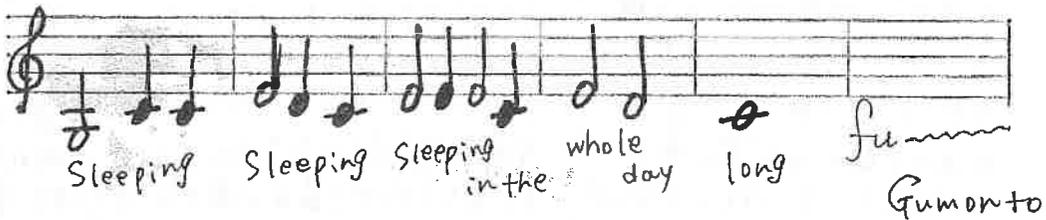
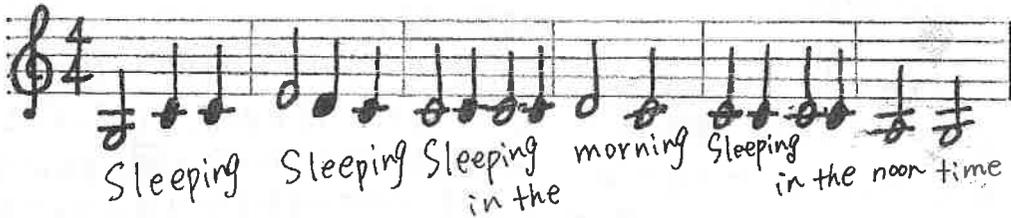
END

# ♪ Let's sing

## Gumonta Song

♪ 作詞 アルバート and シャトシ

♪ 作曲 真美香嬢



上に載せた曲はジャマルプールで真夜中に催されたカルチャーショーで歌われた曲です。

### カルチャーショーの配役

グモント	シャトシ
男その1	アルバート
男その2	アルバート
老女	アルバート
コーラス	Aチームの皆さん

カルチャーショーが終了次の日  
Aチームの皆さんこのグモントソング  
を歌い始めていた。ある時は  
リキ車の上で、ある時は食事時に  
そしてある時はなんと寝ごとで、  
ダッカへ帰ってきてからも歌って  
いる状態で...そしてマカール先生  
の前でもショーをする事にヘモントさん  
は「問題です」と何回も連発。  
そんな事おがまいたしにアルバート  
とシャトシはカルチャーショーをしたのでした。  
ヘモントさん、「ごめんなさい」

## 受けるよりは与える方が幸いである？



井上 儀子

与えることの難しさ。このことは、スタディーツアー始まって以来ずーっと続いている論議です。深く考えれば考えるほどわからなくなってしまいます。そんな深刻に考えるのはよそう……。不用意にものをあげない……。友だちとして心をこめたプレゼントならいいのではないのか……。などさまざまな葛藤の末、要は各自の判断で……。という暗黙の了解に至ってきました。

と言うのは、安易にものをあげることによって「日本人は金持ちだから、ものをもらって当然」という図式ができあがってしまい、私たちスタディーツアー・メンバーの持ち物を見ては、「これくれ。あれくれ。」と言っていた時代があったのです。このことをマラカール先生は非常に嫌い、ずいぶん厳しくスタッフに言い渡されていたと思いますが、私たちは先生や村人から要求される度に困ってしまい、嫌な思いもしてきました。

それが、ただバングラデシュを訪れる外国人というだけでなく、たとえ短い期間でも共に生活をし、心の動く関係ができてくると、そういう要求はいっさいされません。ACEFスタディーツアーも14回と回を積み重ねてきて、このことで煩わされることはなくなり、とてもいい関係になってきました。これはSEPスタッフの努力もあり、ACEFメンバーの、バングラデシュの人々と友だちになりたいと、心からのコミュニケーションを願う気持ちの結果です。

今回、残念ながらACEFの意に反して「施し」を配り歩くメンバーがいました。人はそれぞれ生きてきた背景が異なり、価値観も違います。そのことを思うがために何も言えなかった私に責任はあります。しかし、私の耳から離れない言葉があります。「長年積み重ねてきたものが、『お金』（物）で、たった1日でつぶれてしまうのよ。」これはACEFの勉強会にお招きした吉田ゆりのさんの言葉です。《バングラデシュの抱えている問題》と題しての講演で、「お金の出し方は慎重にならなければならない。お金は生かすためであって、つぶすためではない。」と熱を込めて話され、「求められているのはあなたの人間性そのものです。」と呼びかけられました。

与えることは時には簡単かもしれない。でもひょっとして知らない間に、そこに上下関係をつくってしまうのではないのでしょうか。お互いに共感し合うものができたときに、分かち合いということが自然にできるのだと思います。

# バングラデシュ、バングラデシュ、バングラデシュ!



Mr. ゲタ

3月14日付けの毎日新聞の朝刊の家庭欄にイギリスの家庭では、食後の皿洗いに洗剤を使った後、水でゆすがずそのまま布でぬぐっておしまいという記事がのっていました。調理前に食材を洗わないインドやバングラデシュの家庭もそれぞれの慣習があるのでしょうか。バングラデシュに行った人は、食後のお皿をなにごで洗っていたかみましたか?

船戸先生が言われた「よく見ること」の意味がほんとにわかっていたのか疑問の旅でした。

感情的、直情的な理解は、小学生の集団のようでもありました。

バングラデシュの国家経済の現状や国際的地位の理解の不足、バングラデシュの人々の側に立って自分たちの行動を考えてみるよい機会だったのではないのでしょうか。彼らが見たいのは、バングラもどきの外国人ではなく、ごく普通の旅する外国人の様子や考え方、単なるリップサービスだけでなく、自分たちにも将来の希望がもて、夢も実現するのだということも教えてほしいのではないのでしょうか。ジャマルプールのSE P事務所の前に立っている時一人のお母さんが10才ぐらいの心障児の子をかかえて通るのを見ましたがお母さんの顔は挑戦的な表情で堂々と私たちにむらがっている子どもたちをけちらすように歩き去って行きました。この国の医療の貧しさを思うとき多くの障害児たちが放置されているのではないかと考えました。

一般に発展途上国ほど自分の国しか知らないのも、どの国も異常と思えるほど自国を自慢しがります。明治初年おはぐろの女をみにくいと思いつながらビューティフルと言ったり、人糞の臭気に呼吸をとめながら田園風景に感心して見せたりと来日した西洋人の苦勞も思い出させます。

しかしきたない所はきたない、くさいのはくさいというのも本当の親切ではないかと思えます。少なくともSE Pスタッフとは、女性の地位向上や村の拡大と森林破壊など率直な意見交換を知的にする必要があったのではないかと思いました。

特に印象深かったのはニューマーケットに居た四跛のない乞食のことです。(栄養はたりていたようですが)彼は地面に寝たまま首で喜捨を受ける洗面器をおしながら動いていました。その中に私の入れた紙幣も含めて半分くらいのお金が入っていましたが、そこを通りがかったはだしの男の子を呼びとめて、そのお金を集めてそろえて彼の胸ポケットに入れさせました。ごく普通にたのまれごとをはたしてその子は立ち去りましたが、バングラデシュの人々のやさしさを象徴するようなできごとでした。

もう一つはあのYMCAで踊りをみせてくれた小学3年生の女の子です。満面にえみを浮かべて蠱惑(こわく)的におどる少女の顔と村の学校へ通う晴着を着て口紅をまっかにぬって笑う少女たちのえがおが重なってなんともいえない夢幻の世界をかいまみせてくれました。

(編集者註: 「Mr. ゲタ」は河東森二郎さんの通称です。)

# CO-WORKER ということ

中西絵津子



「我々は教えに行くのではない、学びに行くのだ」

「施しに行くのではない、むしろ与えられるのだ」

「援助する、されるの関係ではない。SEP と ACEF とは、対等のパートナーシップであり、CO-WORKER なのである」

…こういうことを勉強会で学びました。オーケー、わかります。ACEF は、食べればなくなってしまうパンを携えていく団体ではなく、より多くの子どもたちが自ら身心の糧を得られるようになるため、教育の場を作り出している NGO であります。

でも…と、それでも疑問が残っていました。CO-WORKER といったって、結局は「お金を出している」ということなのではないか。お金を出している団体が、「視察」に行くツアーと、「スタディ」ツアーは一体どうちがうのか。…これが彼の地で日々を過ごしてみるまでの、私の偽らざる思いでありました。

さて、だいたいにおいて私の「読み」なんてのはろくなもんじゃありません。今回も、うれしい「読みちがい」があったことを、私はここに喜んで認めたいと思います。

一つには、このスタディツアーなるものが、クリスチャンにとってもノンクリスチャンにとっても、「神さまに出会う旅」であったこと。私たち人間が、神さまによって守られ、与えられなければ何一つもない存在であることを、バングラデシュは静かに教えてくれました。日々の糧も健康も旅の安全も、そして朝夕みことばと祈りを分かちあったメンバーたちとのつながりも、主が与えてくださったものなのだと改めて気づかされ、感謝せずにはいられません。これはこのスタディツアーならではの学びだと思えます。

さて、もう一つは CO-WORKER ということです。私は十年会社で働きましたので、会社がどういうところか、同僚というのがどういうものか、肌身にしみて知っています。私が勤めた公文という会社の組織は、直接子どもたちを教える（公文式は自習方式なので文字通り教えるわけではありませんが）先生たち（公文では「指導者」と呼んでいます）、先生たちをサポートする全国各地の事務局で働く局員たち、先生方に提供する教材を作ったり改訂したり指導法を研究している本部スタッフたち、広報宣伝や人事経理などの部門のスタッフたちによって成りたっています。先生だけでも、スタッフだけでも「公文式」はたちゆきません。

バングラデシュのいくつもの SEP スクールを訪ね、アルバートさんやヘモントさんと語り合い、マラカール先生の人柄にふれるうち、私ははっきりと実感しました。SEP と ACEF とは名前はちがうけれども一つなのだということを、一つのプロジェクトを進めている、一つの組織の別部門なのだということをです。ACEF は SEP にお金を「援助」しているわけでは断じてなく、我々の部門の「役割」としてお金を作り出したり、広報活動をしているのだと、りくつではなくわかったのです。

どこかの国では営業が汗水流して稼いだお金を資金部がやたらに不動産に投機して、バブルがはじけてお金も泡と消えてしまったりしましたが、我々が SEP は 1 タカたりともムダにせず子どもたちのために使っています。そして素晴らしい成果を上げています。マラカール先生の祖国とその明日を担う子どもたちへの思いは、着実に形となり、発展し続けています。このプロジェクトは、バングラデシュという国にとって本当に価値のあるすごいものだと思います。

私たちは SEP の CO-WORKER です。私はそのことにとっても誇りを感じています。アルバートさんやヘモントさんや、それから若くはにかみながらも子どもたちの前ではしっかり頑張っているあの先生たちの CO-WORKER として、私たちが愛しているあの国の子どもたちを共に育てているのです。



とき  
バングラデシュの時間の中で

原田 真実香

1年前、第12回のスタディーツアーに参加して、私は沢山の素敵な人々に会い、ジャマルプールの素晴らしい大自然の中で、沢山の勇気と希望を与えられました。バングラデシュでの2週間は沢山の人の受け入れられ、愛されて、そして私も愛を持って人々と接することが出来た様に思います。私はそのすべての出来事を絶対に忘れたくない。と自分に言い聞かせていました。だけど今回バングラデシュへ行って私は自分が思っていた以上にいろいろな事を忘れていた事に気付きました。

バングラのあのゆっくりとした時間の中でゆっくりと自分自身を見つめ直す事を忘れ、日本の生活と変わらずあせっていました。早く何かを見つけなければいけない。早く何かを感じ取らなければいけないと、とにかくあせっていました。だけどあせればあせる程、何も見えなくなっていました。そんなあせってばかりの私をメンバーやバングラの大自然はゆっくりと温かく包んでくれました。そして私は自分を取り戻す事が出来ました。

去年は学校の先生は「あー学校の先生かー」という何か距離を感じていましたが、その昨年出会った先生方が私の事を覚えていてくれて、今回再会できた時は“友達”という感じでとても親しい人に思えました。とてもうれしい事でした。

バングラには私の友達がたくさんいます。その大切な友達が抱えている問題を私は日本で共に考えて行きたいです。

私はACEF、SEPを通してしかバングラデシュを知りません。だけど、ACEFやSEPが私にとってバングラを知る第一歩です。つい、あせってしまう私ですが、あのバングラの時の様に・・・アシュテ アシュテ

P. S. 愛情いっぱい私を包んでくれたみんな、ありがとう♡

たくさんの感動のあとに. . .



## 森若葉子

バングラデシュ最初の夜、外からのざわめき、アザーンの音、やもりの鳴き声、突然の停電、そしてトイレが使えなくなった. . . 私は恐怖と緊張で、ただひたすら朝が来るのを待った。あの不安でいっぱいだった私が、今では、バングラデシュが好きでたまらない。あの国の魅力をいっぱい見つけたからだ。それは、すばらしい自然であり、出会った多くの子供たちや人々の温かさであり、豊かに響く歌声であり、また、私がみんなからもらった愛だと思う。これらと出会えたことを本当に感謝している。

不思議にもバングラデシュでは、自然に素直な自分になれる気がした。シェアリングでも、感じることをすべて伝え、また意見も求めている。聖書に触れ、賛美歌を歌い、神に祈りを捧げることも、私を穏やかにしてくれた。こんな気持ちになったのは、たぶん、人々と接する機会を多くもつことで、お互いに分かり合おうとしていたからだと思う。だとしたら、寺子屋で出会ったたくさんの子供たちの、抱えきれないほどの草花や花飾りをくれるあの純粹で懸命な姿も、SEPスタッフの、私たちを温かく迎え入れてくれる寛大さや、教育に対する思いや意欲も、バングラデシュの人々と私たちが心を通わせることができたから生まれたものではないだろうか。私だけでなくメンバーみんなも、いつの間にか自分をさらけ出していたのがうれしかったし、ずっとこうありたいと思った。

とにかく、この2週間は感動と驚きの連続だった。いろんなことがありすぎて気持ちの整理ができない。いろいろ考えをめぐらすが、楽しかったことしか思い出せないのだ。そんなとき、アルバートが言っていた言葉が頭をよぎる。「最も大切なのは、ここで学んだことよりも、日本に帰ったときに何を考え、どう伝えるか、ということだ。」

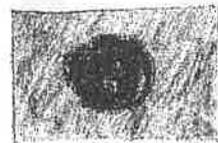
私は何を学んできたのか。たしかにバングラの魅力は見つけた。でも、その背景にある多くの問題を私はどれほど理解できたのだろうか。くやしくて涙がこみあげてくる。バングラに近づいたはずなのに、なぜか遠く感じた。

日本に帰って、多くの考えるときをもった。まだ私にはわからないことだらけだ。いま思うことは、今後もバングラデシュやアジアに関わりたい、そして少しずつ、自分がすべきことを見つけよう、ということだ。

最後に、私はこのスタディツアーで、「愛をもって接する」ことを知った。出会ったすべての人から、愛をもらった。このことは私にとって、とても大きな意味をもっている。

このツアーが、出会ったみんなにとってすばらしいものとなりますように。

শুভকৃতজ্ঞতা  
আরিকাতো



## 涙くん、ありがとう

高崎 哲

感情をおもいきり表にだして泣きまくった2週間でした。バングラデシュのジア空港に着きファルークさんにあった瞬間、故郷に帰って来た感じと会いたかったファルークさん会えた嬉しさと自然に目から涙がポロポロと流れ出していました。そして3日目に行ったブーパイルでも周りの人などおかまいなしで泣きくずれていました。そんな時に僕のバングラデシュでの母親的存在のデコスタさんが近くに来て優しく「泣かないで笑っていてちょうだい、私の息子は笑っているほうが似合っているわ」と耳もとでささやいてくれました。

バングラデシュの人の優しさがうれしくて、またまた泣き始めるシャトシなのでした。そしてジャマルプールで過ごした1週間は忘れることの出来ないものになりました。ベンガル語を丁寧に教えてくれた我が相棒のムクレス、自由時間にいろんな所に連れてってくれたカーンさん、毎晩一緒に部屋で寝起きを共にし夜遅くまで話したり、歌を歌ったりしたショフィックさん、アルバートさん、ヘモントさん

「オネック・オネック・ドンノバット」 Aチームのみんな沢山の愛をありがとう。そして気まぐれな涙君、ありがとう。



# 受け入れられる喜び

中村 ゆか

私は、今まで人と接するのが、苦手な人間でした。人と目を合わせることを恐れ、笑うことさえつらいと感じることもありました。自分は、だめな人間だと追いつめ、誰からも認めてもらえない卑屈になっていました。そんな時、バングラデシュへ行く機会が与えられ、ツアーに参加することになったのです。実際にバングラデシュに来てみて、初めは不安で、不安で、仕方なかった。日本とは、全く違う環境で、私は二週間も過ごせるのかと心配でした。しかし、寺子屋訪問の際、たくさんの子供達と出会い、たくさん笑顔を見た時、私の不安はすぐに取り除かれました。日本にはないものを感じました。特に農村では、雄大な自然と共に人々のあたたかさが、私をすべて包みこんでくれ、愛されることの喜び、受け入れてもらえる喜び、生きている喜びを感じました。日本にいる時は、自分が嫌いでどうしても好きになれなかった。でも、バングラデシュに来て、自分のことをゆっくり時間をかけて見つめてみると、確かに、私は情けない、嫌な部分も持っているけれども、そういう部分もすべて自分で受け入れられるようになり、好きだと思えることができたのです。このツアーは、私にとってただ良かったと言いで言い表わせるものでは、ありません。様々な思いが、心の中で満ちあふれているのです。きっとバングラデシュでの経験が、これからの私を支えていくことでしょう。バングラデシュで感じたこと、考えたことを忘れずに生きてゆきたいと思います。

ありがとう、バングラデシュ！





## バングラデシュとの出会い

東京女子大学1年

池庄司千春

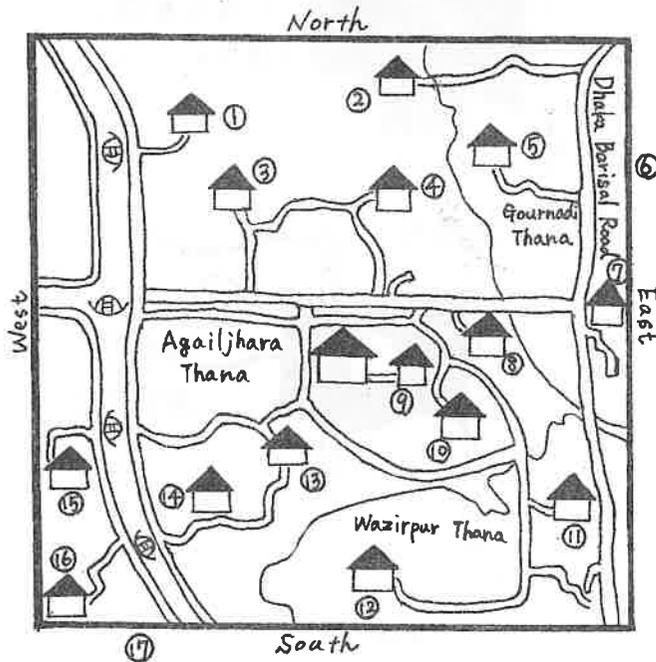
2月27日深夜、ダッカに着いた。砂ほこりと排気ガスと汗が混じりあったような独特なおいと、おりの中の動物を見るように私たちをじっと見つめている人々、物ごいをする少年。朝早くから流れるアザーン、クラクションを鳴らしながら我先にと先を急ぐ車、ベビータクシー、力車、そして人々ビルが立ち並び道端にいくつもの店が開かれている。ダッカは本当に騒然としていた。しかし、その片わらで目に映ったスラム街、物ごいをする人達、思わず口を覆いたくなる程の排気ガス、投げ捨てられたゴミ、そういったものも忘れることができない。

農村での生活は、いつもどこかで求めていながら日々の生活で失いかけていた大切なものを私に与えてくれた。のどかな緑の風景、青い空、道端で寝ている牛、山羊、吹く風、大きな夕日、星空。毎日のおこる停電も全く苦じゃなかった。ただ、私は外からの目でしかこの国を見れていないんじゃないかと思うと胸がいたんだ。

そして、<sup>私に</sup>バングラデシュから体験しなければ得ることのできないさまざまなものをもたらした。一番は人々の温かさだった。外国人という好奇心を超えて彼等は私たちに接してくれた。子供たちと楽しく遊んだことや、仲良くなった力車のおじさん、教会でベンガル語のわからない私に聖書をめくって教えてくれた女性、そしてSEPのスタッフのみなさん。私は国籍や宗教が異なっても、言葉がうまく通じなくても、人と人の心は交じ合うと信じられる。このツアーで得たぬくもりや心の痛みを、これからの人生に生かしていきたい。ツアーに参加できたことを心から感謝します。

# Bチーム In Kathira

## — Barisal Working Area Map —



### ~ SEP School Name ~

1. Kadumbary
2. Valueksy
3. Bakal
4. Tetla
5. Moisterkandl
6. Mahilara
7. Gounnadi
8. Goila
9. Kathira
10. Oichermath
11. Kathalbary
12. Kunuliah
13. Satsimuliah
14. East Bagdha
15. Amboula
16. West Bangha
17. Shatle (south)

## — 日程 —

3/3 Dhaka から Kathira へ

3/4 Satsimuliah School 訪問

3/5 Kathalbary School 訪問  
Home Stay (本間・てつや・じゅん)

3/6 2チームに分かれて訪問

1. Kathira School  
(本間・三村・てつや・じゅん)

2. Valueksy School  
(船戸先生・公文・ヒロミ・ケイ)

3/7 Mahilara School 訪問

ヒンドウ寺院 訪問

カルチャーショー

3/8 教会へ

日本食を作る

Home Stay (公文・三村・  
ヒロミ・ケイ)

3/9 Amboula School 訪問

Staff との ディスカッション

3/10 Dhaka へ 戻る

# Staff & メンバー紹介

Faruk san



- SEP マネージャー。
- 日本語を話すことが好き。
- はずかしがりやさん。

Gomes san



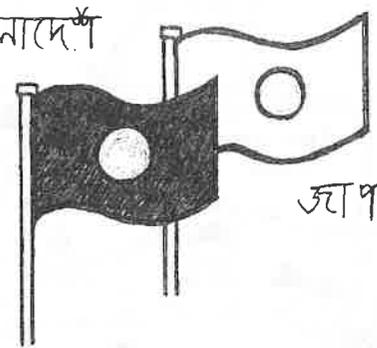
- SEP staff。
- 家事を7割していると言語。
- 良き夫らしい。

Asim san



- SEP Driver。
- 驚異のドライブテクニックを持つ。
- 実家が Kathira にあるので、いよいよ自転車が登場。

বাংলাদেশ



জাপান

Sagar san



- Kathira のオーガナイザー。
- 朝日に弱い、めんじくさかり屋。
- 何処か写真を撮る時、ポーズを付たがる。

Daniel san



- Kathira のスーパーバイザー
- Kathira の設立当初からいる。
- 人を温かくさせる人柄の持ち主。

Bernard san



- Kathira のスーパーバイザー。
- お母さんとよく似ている。
- 派手好きか?!

Joseph san



- Kathira のスーパーバイザー。
- とってもハンサム。
- Keiko に謎の歌を吹き込んだちよう本人。

### 船戸先生

- Bチームのリーダー。
- アジアがとても好きで、経験豊富な人。
- いつでも熱く語っている。

### 本間さん

- 家族のこと、特にお孫さんのことをいつもいじにかけている。
- 家族思いのお母さん。

### かずこさん

- Bチームの副リーダー。
- べがとても優しい笑顔の人。
- どうやらものマネが得意らしい。

### てつや

- 子供たちの良き遊び相手。
- オシャレなこともあるが、実は大人。

### 直美さん

- 実はものすごく面白い。
- 英語がとても上手。
- 「びっくりこいちゃって」がログセ。

### じゅり

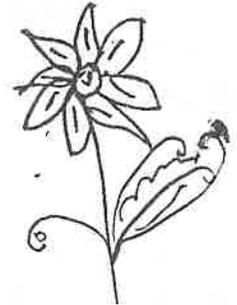
- 気付くと泣いている愛の涙でいつもいっぱいの人。
- 優しいかんぱり屋さん。

### ヒロミ

- 何事にも納得しつつ歩んでいる。
- 「ひびい話だ」「そこに愛はあるのかい？」というログセがある。

### ケイコ

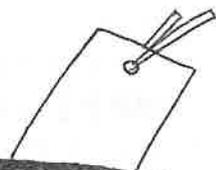
- 何事にも一生懸命で一直線。
- 理由もなく得意がる。



# 学び・発見



～日誌より～



3月3日

これから迎えるカティラでの一週間は神様から頂くとっても高価な贈り物になることを期待しつつ、明日に備えました。

(直美さん)

3月4日

午後になると病院の近くの悪ガキが集まってきて、本当に大変だった。よくもあの小さな体で、あれだけ動けるものだなと感心した。

バングラの人は学校で英語を学んでるだけで、積極的に、そして、僕よりも流暢に英語を話すので驚いた。

バングラデシュに来て本当に良かった。  
(てつや)

3月5日

日本で過ごせないような贅沢な時間を過ごすことが出来た。

自然が自然、人間が自然、動物も植物も自然、優しさも自然、悲しみも喜びも自然、心の全てが自然。そんなバングラデシュを私達はどんどん好きになります。

(かずこさん)

3月6日

一人ずつ分かれて見学又指導で、心細かったけれど、笑顔が一杯。ピエロになることの大切さを感じる。

(本間さん)

3月7日

ここバングラデシュでは、私達は何をするにしてもSEP staffがいなければ何をするにしても無力だと感じた。

(ケイコ)

3月8日

子供たちは相変わらずエネルギッシュで、笑顔が絶えない。彼らと毎日触れ合う内でだんだんその個性もよく見えてきて、うれしい。

(ヒロミ)

3月9日

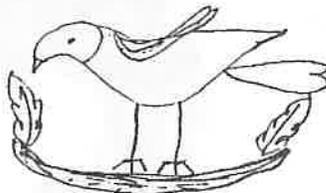
いくら言葉が分からなくても、心は通じると思っていても、伝えきれないことが沢山あるんだなと思いました。人に伝えるのって、同じ日本人同志でも難しいのに、やっぱり言葉の壁は厚いのかな。

(じゅり)

3月10日

Christians never say Good bye,  
but we say, See you again!

(直美さん)



# 学校訪問



3/4 (水) 恐るべし、バングラの子供達！彼らの秘めたエネルギーに圧倒されっぱなしの1日であった。

サッチムリア小学校を訪問した。机や椅子がなく、シートの上に座って勉強。それでも、子供の授業に取り組む姿勢と真剣な眼差しは、何となく学校に行きたくて授業を受けている感じのする日本の学生・生徒以上にキラキラ輝いていた。



3/5 (木) 9:00少し前にカタルバリーに向けて出発。リキシャ2台とバン2台ガタガタ道だったけれど、風景が本当に美しく、田んぼの緑人や牛ののんびりした動き、ポカーッと見入る者あり、歌う者あり。約1時間かけて学校に到着。

200名強の子供達が学んでいる学校。到着した時、朝礼のような集会をしていました。女の校長先生がビシッとままとめておられ国歌もみんなで歌って下さいました。その後、Grade 2~5の4クラスに1~2名ずつ入り、20分程度授業をさせていただきました。



各々の名前をカタカナで書いてあげたり、似顔絵を書いたクラス、歌を歌ったクラス、様々でしたが子供達と楽しい時をもつことができたようです。

3/6 (金) 2チームに分かれて訪問をしました。(沢山の学校を訪問したいので) カティラ School 165名、2~6年生の4クラス。一人ずつ分かれての見学。又、授業で心細かった。けれど、笑顔が一杯。縄跳びは大人も子供も人気がありました。

3/7 (土) 今日訪問する学校は遠いので、車に乗って行った。学校は、新しく出来たばかり。この学校は、地域に住む住民が学校を必要と考えて土地を提供。住民の手によって建てられた。そこで、SEPのことを知り、日本人に連絡をとって今に至るが、現段階では学校として十分とは言えない。子供達は緊張していて殆ど反応なし。

3/9 (月) アンボイラー School へ、船とバンガリーを使って行きました。乾期のたためか、船の調子があまり思わしくなかったけれど、ゆっくり、ゆったりとした気持ちになれ少しずつではあるけれど時は流れ続けているんだということを感じました。学校では2・2・3に分かれてそれぞれ少し授業に参加してから、絵を書いてもらいました。



水のくに



Katsuma

乾燥にうれしい

恵みの雨

洗われた翌日の村は  
特にきれいでした。

数本の竹でできた橋は  
慣れないと大変です。

「尊さを感じる」程の  
美しく、広大な水田  
モーターで水を引きます。

エンジンボート

ゆっくりゆっくり、止まりながら  
進みます。

田には  
水草がいっぱい。

池に続く石段には  
人が集まります。

池

人々の生活に欠かせない。

洗いものをしたり、水浴びをしたり、  
必ず誰かに会える、憩いの  
場でもあります。

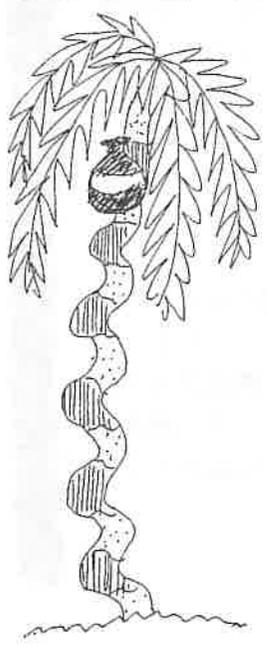
# Kathika

## 日本しよくパーティー

- メニュー
- ▼ ちらし寿司
- ▼ てんぷら  
(ナス・カボチャ  
えび・玉ネギ  
人参・カキモリス)
- ▼ おみそ汁
- ▼ 白玉入り  
フルーツポンチ

僕らは、感謝の気持ちを込めて  
SEPスタッフの方々のために、日本食を  
作りしました。人参かと思たら、  
実は芋だったり、ししとうと勘違い  
してカキモリスを何本も揚げて  
しまったり...と、小さな「アニング」が  
幾つかありましたが、できた料理  
は、とても美味♪

特に、じゃりかん果の白玉は大人気でした。  
この日も買い物を手伝ってもらい、後片付けも  
お願いしてしまうなど、結局頼りきりの僕ら。  
みなさん、本当にありがとう!!



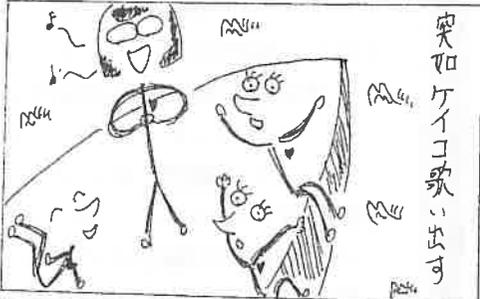
## ゲジュールカシ

バングラデシュには、幹を削って  
取った樹液から砂糖を作る用の  
ヤシがあります。絵←のように  
幹がくねくねして、削られた跡が  
ついています。1本の木を3日間  
削り、次の3日間は休ませると、  
いう風に、3ヶ月をくり返す  
そうです。

## ケイコのがぞ歌



アンボイラー School への  
奇はゆくり進む



突如ケイコ歌を出す



歌詞(意味不明)  
チカマロレ  
チカマロレ  
ニョカレビカレ  
トシムラ  
チカマロレ  
師シヨセアセン



ケイコは今も  
歌っているー

## 本間さん競泳

宿泊した病院の前の池で水浴び  
をしていた本間さん。1ヶ月間にか  
クロールで近所の子供たちと  
競争をはじめました。高い水しぶき  
を上げて泳ぐ姿、天晴でした。

# Home Stay

## ケイコ

私がお邪魔したお宅は、お食事を作ってくださいるリタさんの親戚のルッチーさんのお家です。その夜は、昨晚雨が降った為空が澄んでいて、日に日に満ちてゆく月が放つ青白い光が、その道を照らしていました。

ルッチーさんの家族は、お母さんと4人の兄弟とルッチーさんを含めた2人の姉妹、それから緑色のオウムです。真近でオウムを見ることができて嬉しかったです。しかし言葉の壁が厚いため会話が弾まなかったせいも、早々と寝ることになってしまいました。私はルッチーさんと一緒に寝ました。夜中、寒けがして目を覚ましてみるとルッチーさんに蒲団を取られていたのでとりかえました。

翌朝、ダニエルさんが歯ブラシ片手に迎えにきたので、ルッチーさんに別れを告げました。朝霧の中寝起きのダニエルさんと歩く道は、とても穏やかでした。

暖かく迎えてくれてルッチーさんとその家族に、ありがとう。

## ヒロミ

私たちはテレビでニュースを見ながらお互いの国や私の家族の話をしましたそれから話題が宗教に移りましたが、無宗教感が理解できなかったようで、そこで話はとぎれ、伺ってから1時間程で眠ってしまいました。

うまく英語が通じなかったこともありましたが、もう少し何とかなのではないかと不満が残りました。

## じゅり

人の出逢うというものは不思議なものです。私のホームステイ先は、夏にお友達が行ったお家でした。お父さんと仲良くなったトニーという女の子が英語を話すことが出来たので、とても会話が弾みました。特にトニーと盛り上がったのは、チャゴル（ヤギ）とシャゴル（Kathiranのオーガナイザー）のベンガル語の発音の違いについてです。私にはの違いについてです。私にはどうしても同じに聞こえてしまうのです。お互いに少しの英語とベンガル語でしたが、本当に素敵な時が与えられました。

## てつや

特に印象に残っているのは、一夜明けた朝のことです。朝の礼拝に間に合うように時間ばかり気にしていた僕に、樹理のホームステイ先の方がお茶を出してくれました。僕は時間ばかり気にしていたのに、バングラの人々は親切にしてくれる。僕は自分の心の狭さを恥じると共に、感謝でした。ホームステイ先の家族だけでなく、その御近所のみなさんに迎えられていることを知り、バングラの人たちのおおらかな温かさを感じました。

### かずこさん

お母さんを亡くしたShilviaの家族は、20才前後の兄弟だけの若い家族でしたが、全てのもものが清潔に整えられ、心をこめて準備されており、暖かい気持ちで過ごすことができた一晩でした。神様の愛を中心として、家族の愛があり、必要なものは神様が全てご存じで整えてくださっていると感ずることが出来る家族。以前から仲の良かったShilviaと枕を並べて眠ることができたことが、本当にうれしかったです。

### 本間さん

みどりさんとおっしゃる方が良き足跡を残して下さっていて、良きお交わりが出来、マザーテレサのお写真を戴く。

シャゴルさんの御親戚の方で、みなさんクリスチャン。「私たちの国籍は天国です」と、マザーテレサの生徒として3年間学ばれた70歳の方が賛美をして下さり、聖徒の交わりを与えて下さって感謝でした。

### 直美さん

カティラで私が泊めていただいたRitaさんのお宅では、ご主人と子供さん3人と弟さん夫婦の7人家族でした。

Ritaさんは、私たちBチームのメンバーがカティラに滞在している間、毎日三度のお給仕をして下さった方々のお一人でした。私たちの朝食の準備のために毎朝3時に家を出るRitaさんが、たった一晩でも私を受け入れてくださったことについて、最初は申し訳ない気持ちで一杯でしたが、ご家族の方々は私と本当に仲良くして下さい、まるで本物の家族の様に扱った事が印象的でした。家の中でたったひとつしかない電球を囲んでの交わりの中で、私はこの、アジアの方々との深い絆を実感することが出来て改めて感謝、感謝の一日でした。



# DISCUSSION

カティラに滞在を始めて一週間たった9日の夕方、私たちはスタッフの方々とのディスカッションの時間を設けました。内容は多岐に及び、予定していた2時間では足りないほどでした。特にバングラデシュの壮大な水田の景色に尊さを感じたと言った宮崎恵子さんの質問から始まった農業（米作）についての話題はとても興味深いものでした。その概要をここに紹介します。

Q / 米は直播きか、それとも苗代を利用するのですか？

A / 苗代を利用します。そのほうが稲が田圃にいる期間が短くなり、1年に3回の米の収穫に、より有利になるから。

Q / 天候のせいで収穫が左右される時はどうしているのですか？

A / タイ、インド、パキスタン、合衆国などから輸入します。

Q / 米を輸入するのは不作の時だけですか？

A / 基本的にはそう。でも、一時の輸入がその後の貿易体系を作ったり、何らかの条約締結に結び付いたりする事があります。なぜなら、援助国は自国の余剰作物（商品）をいかに解消するかを優先しがちだからです。そしてさらに、幾つかの非政府団体は同様の経済政策を踏んでいます。結果、貿易は時に輸入国の生活習慣、貨幣価値などの文化や生活に大きな影響を与えるということがあるのです。

具体例は省略しましたが、このように米作の栽培形態から政府の政策にまで話は発展し、私たちは様々なことを学ぶ時を得ました。

それでは、宮崎さんの感想で締めくくりたいと思います。

現在世の中は、忙しすぎて自分の事、自分の国のことに精一杯になっている気がします。しかし米を主食とする民族としてもっと、アジア、地球のことを知り、考えることができたらいいなあと思いました。最後に、ディスカッションの際に、場違いのような私の質問のひとつひとつに丁寧に答えてくださったファルークさん、船戸先生、そしてそれに付き合ってくれたSEPのスタッフとBチームの皆さんに、ありがとう。



## 的を得たあゆみに

本間慶子

1998年2月27日ダッカ到着午後10時40分、はっきり言ってショックでした。金網の柵の外から大勢の大人、子どもが柵を越えんばかりに熱狂している姿、私はナイターでもあったのかなと思いました。しかし冷静に歩み進む内、私たちに向けられている人々のエネルギーだったとわかりました。

日本での準備研修で私の旅立ちには既に始まっているにもかかわらず執拗に肩をたたき、ついてくる少年、車に乗って移動している私たちの窓をトントンたたき、窓越しに私の目を見て離さない。2才に満たない、下着もつけていない子を抱いた物乞いする若い母親、何度も何度も小首を傾け差し出される手・・・「神様、私に何を学ばそうとされるのですか。」と問わずにいれませんでした。いとしい孫のぬくもりと重なり、同じ命がここに在るばかりに日毎の糧のためにこんな時間にこんな姿でと、流れる涙は初体験に混乱した頭の中で閉じられた窓の外の彼女を見続けることしかできませんでした。

次の日からの初体験は私の五感に染み込んで即効の栄養剤となり、食事もOK、トイレもOK（カレーは右手で混ぜて食べ、左手で尿便の処理、紙なし水です）。朝はアッラーの神への祈り、夜はヤモリ、くも、蚊に学びつつ、ACEFとSEPの共通の目的である学校めぐりに、私のパワーは全開、「子は国の宝、技術は国の宝」と23年も前、洋裁科を卒業の時送る言葉に書いて下さった先生、その通りのことを今ここで見ていますと、心に叫ぶ思いの訪問。リキシャとベビータクシー、2階建てバス、そして人、人、人、それほど高層でもないビルに日本企業の名前、数社、嫌われていないかなと気になる。

首都の喧噪を離れ農村は「ミレーの落ち穂ひろい」の風景を連想させる遠く地平線を眺めるほどに風に流れる早苗の動き、子羊ののどをくすぐりつつ木漏れ日の中を、歩きで、またリキシャで、そして海かと思えるばかりの河をフェリーで、村に流れる川をモーター船で船上の人となりつつ、単語帳片手に語り合う楽しさ、青年たちは、貧富の差を受けとめつつ、愛国心と信仰心につちかわれ、将来の繁栄を信じ歩まれている姿がある。小さき子らは使命感溢れる先生たちより、目を輝かせ、ノートを大切に、粗品のボールペン、鉛筆で学んでいて、あまり遊びを知らないのかなと思うぐらい私たちと楽しく遊ぶ。私を子どもに帰らせ、又母親とし、妻として、女として、そして地球人としてバングラデシュの人々は、様々なことを引き出して下さった。

「バングラデシュの国旗は？」「あなたの動機は何なの？」「そんなことではその国の人たちに失礼じゃない？」・・・等お叱りを受けつつも、「身体に気をつけて・・・」と送り出して下さったあの人、この人、存在価値がなくなった、55才あとの余命を持って余っていた私、ツアーに参加して初めての出会いがあった若き仲間たち、バングラデシュで出会った多くの人々。「あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。」とさらに押し出して下さったお方は、共に居て助けて下さった。

バングラデシュの地でも復活の主として生きて働いて下さっていて、涙したあの時、聖霊のお交わりを感謝した。今私は与えられた課題にむかって、的を得た余命を活かされたいと願わされ続けています。「ドンノバット」ありがとう。



## 真に動かされるということ

3 回目の Bangladesh。日本に戻ってきて、今回は私は学生ではないから、すぐに仕事が始まり、たまった仕事に追われ、忙しい日常の中に組み込まれていく。寂しい気持ちはあるけれど、私は日本人で日本の社会の中で仕事をする責任をもった立場にある、という事実は変わりなく、そのことを嘆くより、まずあるものを受け入れていくしかないのかな、と感じています。

今回 Bangladesh に行く前に devotion の準備をしている時、正直言って憂鬱な気持ちでした。仕事を始めてから、祈ることが少なくなり、忙しいスケジュールの中で礼拝に出席することすらできない日々が続いていましたが、神様のことを忘れていたわけではありませんでした。でも、自分が真に動かされていると感じることがなく、いつも外側から眺めているような感じ。だから、今回の devotion で、自分自身が御言葉によって動かされていないのに、それを語らなければならないなんて、という気持ちでした。ところが、Bangladesh に行つて改めて聖書を開いてみると、日本で読んでいた箇所と同じとは思えないほど胸に迫ってくるものがある。御言葉に動かされていることを感じる。心の中で御言葉が新しくなっていく。

「忙しい」という字は「心を亡くす」という形になっている、といわれますが、逆に「愛」という字は「心を受ける」「心に受ける」という形をしている、ということを開いたことがあります。私は、心の中には愛を受ける受け皿が必ずどの人にもあると思います。その受け皿は、ある時には空っぽであることによって沢山の愛を受けることができますが、その受け皿があまりにもひからびてしまうと、それを受け取る容積がなくなってしまうように思います。逆に、いっぱい愛されていると受け皿がいっぱいになってしまって、受けとめられなくなるかと言えばそうではなく、いっぱいになると更に容積が増えて、もっともっと与えることができるようになるのだと思います。仕事を始めてからの 4 年間、私はある部分では忙しさの中で心を失い、受け皿を小さくしていたのかもしれませんが、でも、失っていたからこそ今回受けとめることができたことも沢山あると思います。

Bangladesh の子供達のキラキラした瞳の中に、Bangladesh の年を重ねた人々の深いしわの中に、Bangladesh の若者達の熱い口調中に、彼らが今まで生きてきた中で築き上げた「受け皿」というものを感じるし、私自身がそれらによって真に動かされ、私の受け皿を満たしてくれるのです。私を真に動かしてくれた Bangladesh に心から感謝します。そして、この動かされたという気持ちを、私の人生の中で確実に更なる一歩につなげていきたいと思います。

Kazuko KUMON



## 輝く瞳

水野 鉄也

すべての始まりはキラキラと輝く瞳からだった。

このツアーに僕を誘ったスタディーツアー経験者にして、いとこの久美子嬢のバングラデシュを熱く語る瞳は輝いていた。準備会でのツアー経験者のメンバーの瞳も同様だった。初めての海外で戸惑いや不安を感じていた僕に温かく接してくれたSEPスタッフや、たくさんの花をプレゼントにして迎えてくれた子供達の瞳もまた輝いていた。それなのに、僕の瞳には日本にいた頃から鈍い光が宿り始めていて、自分一人の力で世の中を渡っていけるような気がしていた。でも、それは大きな間違いだった。

数多くの出来事を1つ1つ思い起こす度に、自分自身の無力さと浅はかさを思い知らされる。SEPスタッフなしでは何もできないし、物乞いの問題についても、どう対処すべきなのか一人で答えを見つけだせそうにない。だから、鈍い光で照らされた世界のほんのわずかな部分しか見ていなかった僕にとって、バングラデシュでの、ACEFのみんなや、SEPスタッフとの交流、また子供達と遊んだことが今、自分が置かれている状況を把握する上で、この上ない支えになっていると実感できる。

キラキラと輝く瞳につられて、ふと気がつくとも日本から遠く離れた異国の地へやってきた。それでも、言葉と距離の壁を乗り越えて、いつでもどこでも手を差し伸べてくれる人がいた。僕は一人じゃなかった。バングラデシュはすぐそこにある国だった。あとは、僕が手を差し伸べる番だ。すぐ目の前にいる人に向けて……。

\* アジア人として思う \*

March 15th 1998



三村 直美

バングラデシュという国と初めて出会った今回のスタディツアーで私が得たものは非常に思い出深く、また、私の人生においてとても大切なものとなりました。その数々の体験をひとつずつ言葉にするのはちょっとむずかしいのですが、私の一番の宝となったものは、やはり現地の人々との素晴らしい出会いでした。バングラデシュの人々から受けたあたたかい歓迎や明るい笑顔、また、一生忘れることのできない貴重な交わりのとき…。同じ地球上にうまれた私たち人間は、神様の御前に於いてひとつの家族であり、兄弟姉妹なのだというのを改めて実感し感謝するとともに、バングラデシュの人々をととても身近に感じました。思えばタイのバンコクから約2時間、なんだか今すぐにでも飛行機に乗って飛んで行けそうな感じです。

最も思い出深いカティラでは、多くの子供たちが授業を受けに毎日学校に通ってきていました。教える先生を見つめる子供たちの眼は本当に生き生きとしていて、将来の明るい何かがそのまま映っているような気がしました。そのひとりひとりもとても純粋で、一途なものでした。私が教壇に立っていても、いつもこちらのほうが圧倒されてしまうようで、私が教えるというよりは、まるで私のほうが目には見えない何か複雑なものを教わって帰ってきたといった感じです。そんな中で、‘子供のようにありなさい。’と言われた神様の御言葉が何度も何度も思い出されました。日本という国で生まれ育った私たち日本人が、ベンガル人やその他いろいろな国の人々と同じ『アジア人として』今何を考え、どう行動すべきなのか、神様に真剣に祈り求める必要性をしみじみと感じました。日本に帰国してからも毎日のようにそのことを念頭におきながら、懐かしいバングラデシュの人々との再会を心から鶴首しています。この貴重な体験とともに、ひとつの御言葉をお分かちさせていただきます。

‘As the Father has sent me, I am sending you.’

「父がわたしを遣わしたように、わたしもあなた方を遣わします。」

神様が私をどの様にして用いて下さるのか大いに期待し、待ち望んでいます。



# 祈ること

北原 樹理

『逢いたいときにあなたはいない』

少し昔のことになりますが、こういう文章があったと思います。私は今回のスタディーツアーで何回もこの文章が思い出されました。

今回のスタディーツアー参加が3回目になります。今までバングラデシュを訪問して出逢うことのできた人々の中に、もう一度逢いたい人達が沢山いました。そして、何の疑いもなく逢えることを信じていました。その殆どの人達に再会することが出来ましたが、あるひと家族には再会することが出来ませんでした。なぜなら、彼らは2ヵ月前に引っ越していたのです。その事を知った時、日本で時間が流れているようにここバングラデシュでも時間が流れていることを改めて感じました。それは当たり前のもので、理解しているつもりでしたが、私の心の中では自分の行った2週間というのが記憶の全てでそれ以外のことを理解しているようで理解していなかったのです。

私はその家族に出逢って、人の温かさを、そして言葉は通じなくても心は通じるのだということをおぼえてもらいました。また、沢山の愛をもらいました。一言感謝の気持ちを伝えたかったです。しかし、逢うことは出来ませんでした。その時、「逢えないときには一体何が出来るのだろうか」と考えさせられました。「遠い地にいる、なかなか逢うことの出来ない人々に、日々の生活で何が出来るか」と。

気が付きました。「祈ることが出来る」のです。それまでは「祈ることしか出来ない」と、『祈り』というものを消極的なものとしてとらえていました。しかし、「祈ることが出来た」のです。『祈り』は、決して消極的なものではなかったのです。必ず聞き入れられ、届くものなのです。『祈り』を決まり文句のようにとらえてしまっていた私に、一筋の光が与えられました。

よく、「もう3回もバングラデシュに行っているからよく知っているのでしょう。」と言われます。そんなことはありません。先生が何時も仰ることで、毎回行く度に、新しい出逢いがあり、新しい発見が与えられます。自分の弱さや小ささを教えられます。何回行っても実りの時が与えられます。私はまだバングラデシュという国の良い一面しか見ていません。よく知ってるとも言えません。しかし、声を大きくして言いたいです。

“バングラデシュは素晴らしい国です。”

何故なら、バングラデシュにいる彼らが伝えて欲しいことだから。

バングラデシュの人々・国の平安と繁栄を、そして、また訪れる時が与えられることを信じて、祈りつづけたいと思います。

行って良かった

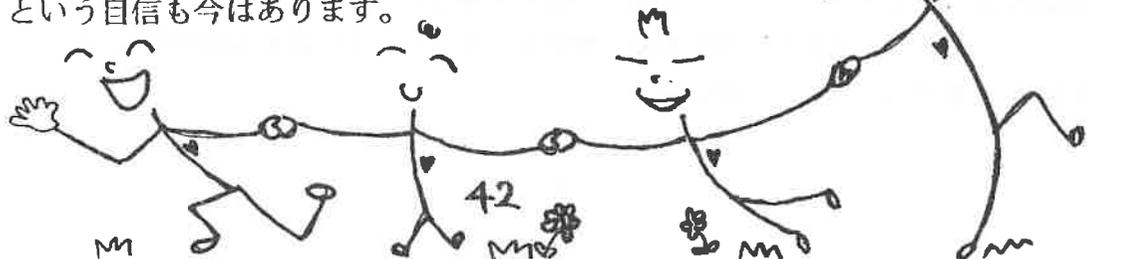
関口 弘美 バングラデシュ体験の感想と云えば、  
「人間って素晴らしい。」

私はそれまで「愛」について考えたことがなかった気がしました。不鮮明に言葉でのみ捕らえ、実際存在することに気が付かないでいたのかもしれませんが。その定義にどの言葉を使ったかをここに書くことはしませんが、その性質は『コリント信徒への手紙、13節』に共感しています。こうした愛をバングラデシュの人々は私（達）に伝えてくれました。言葉や、笑顔などのしぐさで、です。この国の人々は、愛を持って素直だと思います。風土や歴史に育まれた揺るぎのない余裕があるからでしょうか。その事に戸惑いつつも心地好さを感じ、私もいつの間にか素直になっていました。頭ではなく、感覚で愛を学べたのです。

もちろんたった2週間の滞在です。しかもSEPスタッフの方々に完璧に守られていて、実際の生活は何も見えていないとさえ言えるでしょう。

しかし私の感じたものは、私自身には確かに現実です。内部にそれがあつ限り、私の全てはそれに影響を受けたものになり、また、触れる周囲も同様です。帰国して、私の知る狭い日本は何て素直になりにくいんだらうと痛感している部分もあります。でも、それは変われるし、広い日本（以外も）はまだ未知です。どこへ行っても

人間なのだから大丈夫、  
という自信も今はあります。



宮崎恵子

日記を書いていると子供たちが毎日のように遊びに誘いにやってきます。 その子供たちの笑顔を見ていると、落ち着いていられません。 いつも私は子供たちの誘惑に負け、日記を放りだして外に遊びに出ます。 みんなではしゃぎまわって、毎日信じられない程走って、笑って、ボールを投げました。 全く疲れを感じません。 それどころか走れば走るほど、私の身体の中で元気の力が造られ、それが身体の隅々に心臓が血液を送り出されるのといっしょに、身体中に力がいき渡るのを感じました。 とても不思議で快い感覚です。

私はカティラの寺子屋に着くまでの道程が大好きです。 擦れ違い様に挨拶を交わすひと、牛、リキシャ、あぜ道、池、そして広大な水田。 どこまでも広がる田畑と空は、大陸の国を感じさせました。

今でもバンツラデシュで過ごした日々を考えているとふと、あの不思議な感覚に陥る瞬間があります。 それは私は今までに感じたことのない、あたたかかくて、とても快い気分になれる瞬間です。 私はこの時間大切にします。

スタディツアーに参加して、今まで生きていた私の世界というのは、とても小さかったことに気づかされました。 そして考えるきっかけになりました。

バングラデシュと日本の、みんなに出会わせてくれて、ありがとう。



# A・B 合同 Sharing

## ☆Aチーム(Jamalpur)

のりこさん: Jamalpurの変化に驚いた。(教師・村の雰囲気 etc)

外国人が初めて訪れる町でも、友好的に歓迎された。

SEP設立当初を振り返る。そんな気分させてくれた。

ゲタさん : 地域の状況・学校の様子を見た。

SEP staffの配慮から自由に単独行動。

現地の人々の反応もまずまず。地元の人から好奇の目で見られる。

世界地図・バングラの地図・日本地図を持って行って、もっとグローバルな視点を彼らに教えたかった。

えつこさん: SEPの働きの素晴らしさに感心。そのco-workerであるACEFの一員であることを誇りに思う。

アジアを軽視しがちの日本人に不安。それを将来どう繋いでいくかが課題

真実香 : Jamalpurは2回目。行く前は色々不安。

人と人の関わりの中で、沢山の素敵なものを見れた。

以前会った人達が覚えていてくれて、友達として見てくれた。

日本に帰ってから、このツアーで見聞き、感じたことを伝えたい。SEPの働き、バングラの素晴らしさ、この国の奥の深さも伝えたい。

これからの自分がどうあるべきか考えていきたい。

ようこ : 心が通じ合った。

Aチームの仲間と、そしてstaffとも上手く打ち解けた。

聖書の内容はまだ分からないところもあるけれど、私自身を成長させてくれた。

ここで出会った全ての人が私達を快く迎えてくれる温かさに毎日胸が一杯だった。

さとし : 『素敵なお出会い』現地の人達と会話を超えて心をつなぐしながら生活することができた。

SEP staff, Aチームのみんなに感謝の気持ちで一杯。

ちはる : 「愛」を一杯もらった。

自分の出来ることはまだ分からない。でも、この国に恩返ししたい。

ゆか : Jamalpurの全てに感動。

日本では持っていなかったものを与えられた。

人々に受け入れられ、言葉に表わしきれない感謝。

聖書を通じて神様の守りを感じる事ができた。

☆Bチーム(Kathira)

船戸先生 : 今後の課題

- ① staffとのディスカッションは良かった。→ staffも感心してくれた。
- ② 準備会における「寺子屋訪問に関するオリエンテーション」が足りなかった。→ 何をすべきか。何を求められているのか。

本間さん : staffが発言する際に必ず神様に感謝することに感激した。

異文化とのふれあいから涙することもしばしば。

「自分を愛するように隣人を愛せよ」自らをピエロにしてコミュニケーションがとれて嬉しい。

この先、なんらかの関わりを持っていきたい。

かずこさん: 開放的な雰囲気。

4年前の訪問に比べて学校も増えて変化を感じる。

学校建設の経緯が大変興味深い。

寺子屋訪問の目的意識が希薄だったことが残念であり反省点。

一人一人の聖書の受け止め方を聞き、神が側にいるように感じられた。

沢山の子供達に「愛」をもっと与えたい。

てつや : 自然が綺麗。星も虫も沢山見ることができた。

不思議な時間の流れを感じた。

この時は、自分にとって大切な夢のような時間だった。

いつまでも胸の中に留めておきたい。

直美さん : 自分の殻がとれ、これからだという気がする。

自分の小ささを知ることができた。

こういう経験ができて宝だと思う。

じゅり : 全ては「愛」から。特に今回はその気持ちが強い。

バングラの人達の国を愛する気持ちを歌や祈りを通じて知ることができた子供達から沢山の「愛」をもらえて、嬉しい。

「日本人は、この国を離れたら、この国のことを忘れてしまう。」と言われたことがとても複雑。「忘れられたらどんなに楽だろう。」と思うくらい、バングラのことが好きでたまらない。

ヒロミ : 頭で考えすぎている。

「心の温かさは言葉の壁を越える。」言葉でなくても、自分の気持ちを伝える方法があることを知った。

ケイコ : 生き生きと楽しく、自分も子供になった様に喜怒哀楽の感情を表に出せた村の人々やstaffの心の温かさを感じ、自分自身も温かくなった。

思っていることが上手く伝えられないのがもどかしい。

## いわゆる「施し」について

ACEF事務局長

船戸 良隆

今回のスタディー・ツアーにおいて、過去14回のスタディー・ツアーでは全く見られなかった一つの出来事が起こり、ジャマルプール・チームでは、メンバー間で大問題になったということですので、チーム・リーダーとして、ここに一言、説明を加えます。

出来事というのは、メンバーの一員であるK氏が、現地において不特定多数の方々に、市場などで玩具やお菓子を配って歩いたということです。

準備会の時、私はK氏より「玩具やお菓子を買ってあるので、それをバングラデシュに持っていきたいのだが。」という相談を受けました。私は、通常そのようなことはしていないが、と思いつつも「ひとりひとりの子どもに渡すのは問題が起こるので、必ず、現地で先生に渡してください。そうすれば、先生が適当に処置してくれるでしょう。」と答えました。

ダッカに着いた時、K氏が持ってきたボールや玩具などが各地区にと分配されていましたので、私は安心していました。ところが、分配されたのは、その一部分で、かなりの分がジャマルプールに持っていかれ、K氏自身の手によって地域の人々に配られたということです。

私は、K氏の善意は疑いません。わざわざ日本から、自費で玩具やお菓子を買って、貧しい人々に施すのですから、善意と言ってもよいでしょう。しかし、たとえそれが善意からでたものであっても、ACEFは、それを容認することはできません。

なぜならば、ACEFの基本的な方針に反するからです。すなわち、第一に、私たちはバングラデシュの方々を「共働者」として対しているのであって、「物乞い」として見ているのではないこと。第二に、私たちは、バングラデシュの方々の「自立」を願っているのであって「依頼心」を助長するようなことはしないと、考えているのです。かつて、キリスト教会の門前に「物乞い」の人々が並んだという事実を（緊急時は別として）私たちは猛省しなくてはなりません。

全ての「善意」は、よい結果を生むとは限りません。ましてや、その善意が、単なる自己満足であれば、かえってそれが「死を招く援助」（西ドイツ経済協力省担当官、ブリギッテ・エルラー著）となりかねません。以て「他山の石」としなければなりません。

## 第14回ACEFスタディーツアー参加者名簿

### Aチーム (ジャマルブール地区)

- |  |                                     |
|--|-------------------------------------|
| 1 井上 儀子 331-0042 大宮市奈良町97-46<br>イノウエノコ                                   | 048-668-2942 ACEF事務局<br>浦和東教会       |
| 2 河東 森二郎 154-0016 東京都世田谷区弦巻4-1-18<br>カベカ・シンジ・ロウ                          | 03-3429-2945                        |
| 3 中西 絵津子 176-0021 東京都練馬区貫井1-7-19-303<br>ナカニシエツコ                          | 03-3577-4351 日本児童文芸家協会<br>清瀬バプテスト教会 |
| 4 原田 真実香 924-0051 石川県松任市福留660-33<br>ハラダ・マキカ                              | 0762-77-2093 児童育成クラブ指導員<br>金沢長町教会   |
| 5 森若 葉子 167-0041 杉並区善福寺2-22-1 東京女子大 茜寮 03-3395-7394 東京女子大2年文理<br>モリワカヨウコ |                                     |
| 6 高崎 哲 203-0052 東久留米市幸町1-2-17<br>タカサキトシ                                  | 0424-75-1940                        |
| 7 池庄司千春 211-0021 川崎市中原区木月住吉町2035-A-402<br>イケショウジチハル                      | 044-422-5476 東京女子大1年地域              |
| 8 中村 由香 921-8011 石川県金沢市入江2-372<br>ナカムラユカ                                 | 076-291-2183 北陸学院短大1年英語             |

### Bチーム (カテイラ地区)

- |  |                                   |
|--|-----------------------------------|
| 1 船戸 良隆 359-1132 所沢市松が丘1-20-2<br>フナトヨシタカ             | 0429-25-4685 ACEF事務局長<br>教団教師     |
| 2 本間 慶子 214-0032 川崎市多摩区梶形6-5-2-108<br>ホンマケイコ         | 044-934-2344 (株) オプトランス<br>三田教会   |
| 3 公文 和子 362-0037 上尾市上町2-13-16 オクヤシマ202<br>クモンカズコ     | 048-772-3933 医師<br>大宮教会           |
| 4 水野 鉄也 561-0832 豊中市庄内西町2-25-11 ハイヴニュー東京12<br>ミズノテツヤ | 06-334-9111 フリーター                 |
| 5 三村 直美 243-0405 海老名市国分南4-7-23<br>ミムラナミ              | 0462-31-3616 会社員<br>横浜GRACE BIBLE |
| 6 北原 樹理 168-0065 東京都杉並区浜田山2-13-1<br>キタハラジュリ          | 03-5930-6613 鎌倉女子大2年児童学<br>永福町教会  |
| 7 関口 弘美 332-0031 川口市中青木3-9-1-219<br>セキグチヒロミ          | 048-251-7238 東京女子大2年哲学            |
| 8 宮崎 恵子 923-0903 石川県小松市丸の内公園町12<br>ミヤザキケイコ           | 0761-24-6364 北陸学院短大1年英語           |

編集後記



編集委員だけでなく、みんなと協力しあって、報告書を仕上げることができました。みんなのつながりもより深まった気がします。この冊子を読まれる多くの方が Bangladesh に興味を持って、この地を訪れてくれるといいな、と思っ  
ちはる



とにかく、Bangladesh で見たもの、感じたこと、楽しかったことなどを盛りだくさんにしたくて、いっぱい書きました。私、編集の仕事って意外と向いているかも…なんて思いつつ、本当はみんなに会いたいのと、Bangladesh の話で盛り上がるのが楽しかったわけでした。

葉子



すべて手作りという初の試みは大変でしたが、よかったのではないのでしょうか。編集委員以外の方がたくさんお手伝いしてくださったおかげで、ちゃんと報告書が  
樹理

「より多くの子どもたちに教育の機会を与えたい」 — マラカール先生の言葉を思い出します。その思いを汲んだ報告書になったのでしょうか。編集委員とは名ばかりの私でしたが、Bangladesh を愛する者同志、心と頭を寄せ合って時を過ごしたことを、大切にしたいと思いま  
本間

We love Bangladesh.



Chiharu



Mr. Greta



Satoshi



Yuka



Etsuko



Yoko



Mamika



Noriko



Mrs. Honma



Naomi



Keiko



Mr. Funato

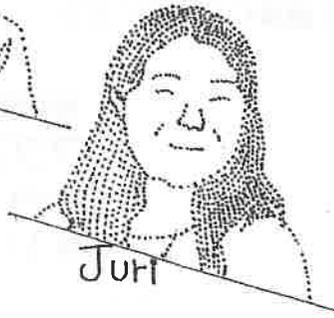
# B チーム



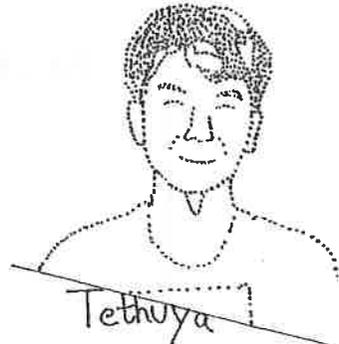
Hiromi



Kazuko



Juri



Tethuya



< バングラデシュに寺子屋を贈ろう >

- ☆ ACEFの会員になりましょう
  - ・団体会員：年額1口 50,000円
  - ・個人会員：年額1口 5,000円
  - ・学生会員：年額1口 2,000円
  
- ☆ ACEFに献金しましょう
  - ・クリスマス献金（金額は自由です）
  - ・一時寄付金（年間いつでも結構です）
  
- ☆ アルミ缶回収と献金にご協力ください（年間いつでも結構です）

郵便振替 00100-0-185540

**アジアキリスト教教育基金**

〒169 東京都新宿区西早稲田2-3-18-26

☎ & FAX. 03-3208-1925

アジアキリスト教教育基金



エイセフ The Asia Christian Education Fund  
〒169 東京都新宿区西早稲田 2-3-18-26  
TEL & FAX 03-3208-1925